

# 民間人から見た教育現場 ⑥

## — 教育の現状を見つめて (4) —

小田村 直昌

○五月の児童朝礼  
五月一日に新天皇が即位され、新しい元号「令和」となりました。大変おめでたく、日本中がお祝いムードになり、今年に限って十連休となったわけであり

ます。  
それでは今の小学生でこの十連休の意味が分かっていでしょうか。私は五月初の全体朝礼を「新天皇即位、新元号記念朝礼」と致しました。これほどおめでたい五月の連休明けに、学校でこの連休の意義・意味を話したり教えた

りしなければならぬからであります。本来であれば「お祝いの全校朝礼」で紅白饅頭を児童が持つて帰ってもいいぐら

いです。平成の時は昭和天皇の崩御で、日本全体が喪に服しておりましたが、今般は違います。こう言いますと、全国の校長や教諭は「私は児童に話しました」という人がいるかもしれません。しかし、その方々は新元号の話をして、新天皇



「新天皇即位 新元号記念朝礼」で話す筆者

ご即位の話をしているでしょうか。私は皆無と思っております。実際に本校の朝礼で「この連休はどうしてお休みになったのかわかる？」更に「四月三十日はどうしてお休み？」「五月一日は？」こう質問しても「天皇陛下の○○」とは出てきませんでしたが、これは大変残念ではあります。家庭でも天皇陛下の話をしていない可能性もあります。今の家庭とはそんなもんかもしれない。だからこそ、学校できっちり話さなければならぬのです。  
私が講堂の舞台でどのようなことを話したかと申しますと「天皇陛下」「百二十六代」「令和」「元号」という言葉をピックアップし模造紙に記し、児童に説明をしました。ある意味「音」として覚えるようにしたわけです。そして「元号」の話の時に日本の歴史、世界で最も

歴史のある国であることを言いました。ではどうして今の学校教育現場でこのようなことを話さないのでしょうか。況して今回は天皇陛下の譲位、即位と新元号でマスコミも大騒ぎでありました。どう考えても「おかしい」の一言であります。大阪府は五月の朝礼で「いじめについて」校長から話すようにいう通達がありました。この「天皇即位や新元号について」は直前に「文科省通達」で「生徒児童に広く教えるよう各学校に任せます」という緩いものでありました。恐らく現場では素通りでありましょう。私はこのことはほんの一例であり、戦後教育そのものと思っております。要は文科省や社会が動いているにも拘わらず教育現場や教育委員会事務局が全く動かないという事です。戦後の現場での日教組教育は随分浸透し、見事という他ありません。組合率は低くても、現校長は元々が組合員であり、若い教師は「日教組教育」を受け、違和感など感じないのであります。  
今般の朝礼で児童にプレゼントを致しました。無理を言って歌手の「山口采希さん」に来て頂き、約三十分間歌って頂きました。「幸せなら手を叩こう」から始まって、「仁徳天皇の歌」「神武天皇の歌」から最後は「令和の御代」という山口さんの歌を披露して下さいました。子ども達は一生懸命聴いておりました。山口さんはお話もして下さいましたが、「仁徳天皇のかまどの煙」の話や今年で二千六百七十九年ということで、先生方も「目を白黒」させておりました。今の教師の実態であります。  
どうしてこのような朝礼をやらぬのかと言いますと、校長はトップダウンができないのであります。やはりこれも「日教組教育」の延長であります。一般の教員に遠慮をしているわけです。「このようにしよう」とか「こうすべき」ということが言えない人が多い。決断も出来ない校長も多いと思います。これだけではありません。早く決めていかなないと子供たちの教育に響いていきます。時間がない学校現場において、一つ一つを各教師に図っていたら、いい取り組み等中々出来ません。今回の朝礼にしましても私は昨年度から「子どものために」やらなければならぬと思い、計画し、教師に「新元号記念朝礼」をやるからと前もって予告しておきました。本来であれば「天皇即位記念」というべきであったでしょうが、事前に騒がれるとつぶされま